

野坂昭如の

七転び八起き

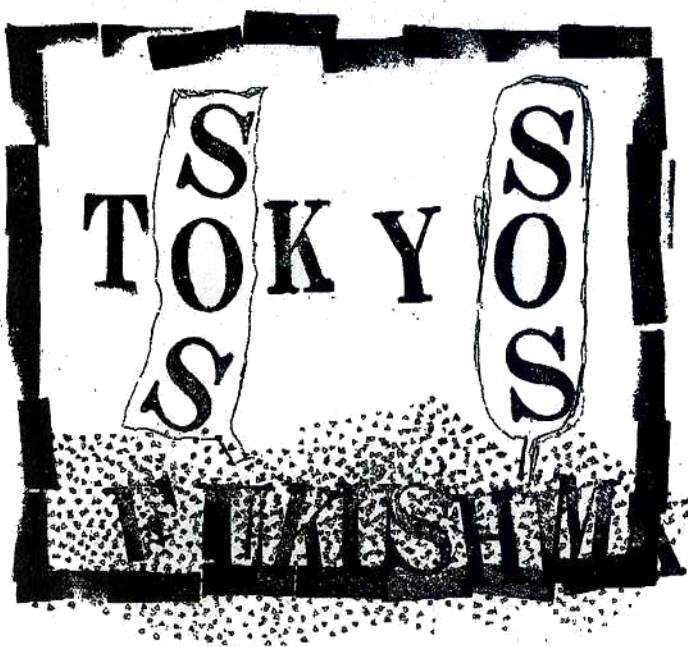
7年後のオリンピック東京開催決定を受けて国全体が祝賀ムード。当初、賛否両論あった。決まれば賛成ばかり。先細りのいわれる日本において、一筋の光明とも言えよう。しかし上調子はよくない。途端に汚染水の話は縮小。祝賀ムードに違和感を覚える人も多いだろう。

かつて日本は、スポーツで世界の弱者であった。そもそも食いの味が違う。普段は米を中心に塩気があればいい。これに野菜の煮物、豆、近海で獲れる小魚が加われば御の字。栄養面で考えればこれで十分。しかし肉と芋が主な常食の海外の人間にくらべれば、やはり体格も小さく、体力面で劣る。

さらにいえば、蹴球を例外に、明治あたりまで日本にボール競技などなかった。個人で技を競う文化が多く、団体競技もまた、近年まで経験がない。主に狩猟で生きてきた民族と、農耕民族の違いは大きい。狩猟はチームプレー、農耕は基本的に個人プレー。ボールに対する執着は狩猟民

浮かれている場合か

第163回 東京五輪決定



題字・イラスト 黒田征太郎

族の本能にはかなわない。一方、昭和10年前後、日本は水泳で強かった。これは四面海に囲まれた島国のおかげ。代々海に慣れ親しみ、泳ぐことに抵抗がない。だがそれも戦後ヘルシンキ・オリンピックなどで、古橋、橋爪が活躍をみせたのを境に、以後しばらく欧米が本気を出して

日本人の入り込む余地はなくなった。若い時代に親しむことの出

来なかったせいで、ほくにはスポーツに対する憧れがある。1964年の東京オリンピック開催時、ほくは、四谷3丁目に住んでいた。開会式を見に出掛け、といっても近くまで行っただけ。華々しい雰囲気は伝わり、熱気にあふれていた。あれから幾年。日本人は個人競技に加え、球技も団体競技も強くなった。選手の手も厚くなった。体格も良くなり、また設備たるや世界の最先端をいく。とはいえ、大学や企業のしっかり支える種目と、練習の場の確保さえ難しいものとの差は大きい。

2020年の東京開催は結構なことだと思ふ。だが今後こちらに陽があたり、いまだ復興半ばの被災地の影が広がり、闇が濃くなるようではない。安倍首相の言う、安心安全は、始まったばかりの原発事故処理につかえる言葉ではない。次から次に問題の発生する原発を状況はコントロールされていると言いつついい加減さ。原発問題を必ず収束させ、東京オリンピックの脅威にはさせないと言及した。これほど明言出来るなら、IOCに向けてアピールする前に、まず国内に向けて言うべきことである。スポーツ庁創設などもいわれている。これも防災庁創設が先じゃないか。7年後の開催に向けて、準備が進むだろう。

オリンピック開催決定によって、まず挙げられるのが経済効果。この数日、こぞって金の話ばかりである。1964年のオリンピックの例が引き合いに出される。敗戦国日本が、高度成長の波に乗っていた頃と今とは全く違う。技術の面での進歩は大いに期待した、が、インフラ特需、結局大企業のみ儲かる仕組みを見直さなければ駄目。不景気、デフレ脱却をもうくる先進国の欲深さ。オリンピック精神とは程遠い。

一方、福島原発、被災者、避難住民、仮設住宅に暮らす人々、どうなっているか。4年に一度のオリンピックとは違う。こっちは早くして数十年はかかる。この後始末。世界中から疑惑の目が向けられ、注視されることは悪いことではないが。古今東西、大都市の常として、盛りの頃に滅びるもの。日本も浮かれ過ぎると足をすくわれるだろう。